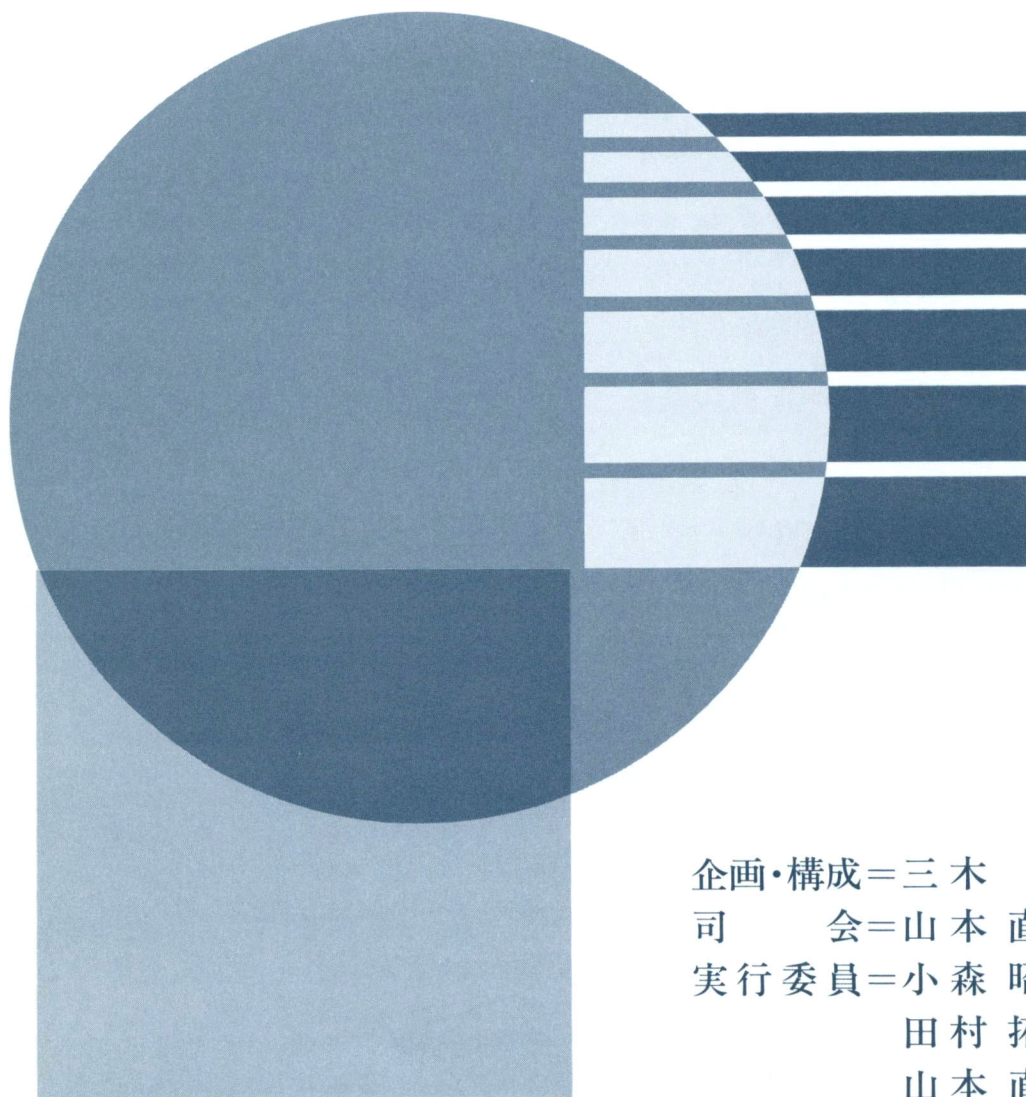


第五回 邦楽器の祭典

日本音楽集団第132回定期演奏会



企画・構成 = 三木 稔
司 会 = 山本 直純(27日)
実行委員 = 小森 昭宏
田村 拓男
山本 直純
(五十音順)



芸術文化振興基金

第一夜 1994年1月26日(水)
津田ホール

第二夜 1994年1月27日(木)
バリオホール

主催 = (社)日本作曲家協議会
日本音楽集団

助成 = (財)三菱信託芸術文化財団
(財)アサヒビール芸術文化財団

1月26日(水) 評論家が選ぶ現代邦楽秀作展

選考委員＝富 樫 康・上 野 晃・石 田 一 志

一部 過去4回の祭典の秀作から

1. 二本の尺八と箏、打楽器のための「舞」

(1993年／第4回祭典出品作)

鈴木 英明 作曲

邦楽器の祭典への参加は「律」に続き2作目。曲は音の対峙や融合など多様な組合せによる2本の尺八を軸にしなが、そこに色彩的リズム的变化によって音楽の輪郭を一層鮮明にするために箏と打楽器を加えた。

竹林をわたる風に耳を澄まし黙想すると、何時しか離脱した心が幻想の世界に舞う。そんな自然との交信の中の音による一コマがこの作品である。尚、演奏者、関係者各位には心からの感謝とお礼を申し上げたい。

[尺八I] 添川 浩史 [尺八II] 加藤 秀和

[箏] 桜井 智永 [打楽器] 前田 文男

2. 三絃と二面の箏のための「虹の糸」

(1992年／第3回祭典出品作)

松永 通温 作曲

昭和56年から7年間に在職した高崎短期大学音楽科の第1期生達が、昭和61年8月に東京のOAGホールでコンサートを催すにあたり委嘱を受けて作曲した。三絃と2面の箏のための作品である。日本の叙情が、伝統的な音楽では、旋法等の制約を受けて必ずしも的確に表現しきれていないことがあるように思っていたので、自由な音の使い方を書いてみた。

[地歌三味線] 工藤 哲子

[箏 I] 桜井 智永 [箏 II] 城ヶ崎美保

3. 二本の尺八と十七絃のための「綵」(あや)

(1990年／第2回祭典出品作)

柳田 孝義 作曲

この作品は横山勝也氏の高弟である古屋輝夫氏のリサイタルのために書いたもので、これ以前にも氏のためには『乗彼白雲』と題した二尺四寸のための独奏曲を書いている。この『綵』では、一尺八寸と二尺四寸の尺八に十七絃が参加している。

それぞれが響く瞬間の出会いのさまや、緯(よこ)に織り成して出来上がる紋様が自然のなかへ流れ込んでそしてまた立ち昇ってくる音の世界を観ること……そんな想いがこの『綵』と名づける動機となった。

[尺八I] 三橋 貴風 [尺八II] 藤崎 重康

[十七絃] 宮越 圭子

4. 邦楽器のための「カタリシス」第3番

(1989年／第1回祭典出品作)

下山 一二三 作曲

この作品は1983年に谷珠美、佐藤順子、竹井誠、高橋明邦の皆さんの北欧、特にスウェーデンとデンマークの演奏旅行のために書いたもので、初演はスウェーデンの北部のウーメオ市で行なわれ、その後いろいろな場所で演奏されている。「カタリシス」という題名の作品は今までに三曲あって、何れも演奏者が声を発するという共通点を持っている。

[篠 笛] 西川 浩平 [三味線] 太田 幸子

[箏] 花房はるえ [打楽器] 前田 文男

二部 集団30年の活動から

1. 金 雀 (1991年第119回定期演奏会委嘱作品)

譚 盾 作曲

「金雀」は、私たちを取巻く目に見えない美であり、その意味がどんどん転換していつてしまう「夢」の輝くような印象を表現しています。この作品は、精神を集中し、聴衆に直面した指揮者と共に円弧に位置した演奏者が、楽器、声、静寂を用いて行う儀式に似ています。通常の音楽における休止としての休符は、ここでは豊かな演奏行為の価値として発展しています。私は指揮者を見る訓練で音楽構造上の間を形創ることにより、音のない音量が存在するを見出しています。演奏行為における無音のダイナミクスというもの存在をここに表現してみたいと思っています。

[尺八I] 三橋 貴風 [尺八II] 加藤 秀和

[琵琶] 田原 順子 [二十絃箏] 吉村 七重

[十七絃] 宮越 圭子 [打楽器] 立枝 恵子

[指揮] 三木 稔

2. 鄧曲 鬢多々良

(1973年第20回定期演奏会委嘱作品)

伊 福 部 昭 作曲

平安中期に興ったという中世歌謡「鄧曲」と、自由な舞い楽「鬢多々良」を題にもつ作品。第一部は箏のソロに導かれた箏群のオスティナートに乗ってやがて、琵琶、笙、ひちりきと笛群が加わる舞い楽。中間部では、琵琶、ひちりき、箏のソロを中心に自由な歌が歌われる。そして、第一部が再現され、やがて樂太鼓に

乗った乱舞で幕を閉じる。

作曲者の唯一の和楽器のためのこの作品は、「作家は自己に忠実であれば、民族的であること以外にありようはない」という作曲者の言葉が、和楽器の合奏に格調高く昇華されているといえよう。

[篠笛Ⅰ] 西川 浩平 [篠笛Ⅱ] 越智 成人
[龍 笛] 藤崎 重康 [能 管] 添川 浩史
[笙] 西原 貴子 [ひちりき] 西原 祐二
[筑前琵琶] 田原 順子 [薩摩琵琶] 石田 さえ
[箏 Ⅰ] 吉村 七重 [箏 Ⅱ] 木村 玲子
[箏 Ⅲ] 熊沢栄利子 [十七絃] 宮越 圭子
[打楽器] 黒坂 昇・望月太喜之丞・白杵美智代
杉浦 邦雄
[指 揮] 田村 拓男

3. 夢十夜 (1973年第19回定期演奏会委嘱作品)

広瀬 量平 作曲

上記の通り1973年、今から21年前の作品である。その年の7月3日都市センターホールで初演された。74年の文化庁芸術祭の開幕式典でも演奏され、79年の第49回定期、88年の第14次海外公演ははじめ海外でも上演

していただいた。創立以来、ずっと親しい気持ちを持ち続けていた日本音楽集団の方々への思いから作曲した。当時としては大規模な曲であったが、当日これが集団のほぼ全員であった。

夏目漱石に同名の小説があるが、それは10の不思議な夢を綴ったものである。留学によって西洋の近代をいやという程知った漱石が、かえって盲目的に近代化してゆく日本の中で孤立していったことを考えると、その夢は暗示的である。曲は多声部的に書かれ、様々な楽器間の幾つもの矛盾や葛藤、対立、親和などの無数のドラマが同時進行しつつ、それらを呑み込む河のように進行する。各楽器が同じリズムで動くことはほとんどない。夢十夜という名にもかかわらず楽章は単一である。(広瀬量平)

[篠笛・能管] 西川 浩平 [尺八Ⅰ] 添川 浩史
[尺八Ⅱ] 三橋 貴風 [尺八Ⅲ] 加藤 秀和
[細棹三味線] 原田富士江 [太棹三味線] 田中悠美子
[琵琶] 田原 順子 [箏 Ⅰ] 吉村 七重
[箏 Ⅱ] 桜井 智永 [十七絃] 大島菜穂子
[打楽器] 黒坂 昇・前田 文男・白杵美智代
立枝 恵子
[指 揮] 田村 拓男

コラボレーション 讃歌

三木 稔

「邦楽器の祭典」が五年目を迎えることになった。今回は祭典らしく三夜のイベントを行うことができる。作品を新たに寄せつづけてくれている作曲家たち、それを受入れて音の実体を作り出す演奏家たち、日本作曲家協議会と日本音楽集団というヒエラルキーを異にする芸術団体の協力ということで、この祭典は現代の文化史上に大きな意味を残すに違いない。

それを確信してスタートしたのが1989年。両団体の運営を圧迫しないよう、祭典とはいえ出発は一夜のコンサートで、出品作は各五分に制限して、より多くの作曲家に邦楽器にアプローチするチャンスを持って頂いた。できるだけ早い機会に時間制限をなくし、毎年充分な数のコンサートを行って、この分野の作品の充実を計りたいと実行委員会ではいつも語り合われるが、残念ながらまだそこまでいかない。

今年の企画が実現できるのは、もちろん関係者の努力によるが、三菱信託芸術文化振興財団とアサヒビール芸術文化振興財団の助成が極めて大きなウエイトを持っている。そういった助成なしに、芸術家たちのボランティア精神だけでは、日本の創造行為は閉塞してしまう。両財団に心から感謝すると同時に、早く不況を脱して、より豊かな芸術創造環境の整う日が来ることを祈るばかりである。

さて、今回は例年の新作を中心とした一夜に加え、邦楽器の機能を知りたい人たちのためのレクチャーと、

過去の秀作展を加えた。後者については、いわゆる現代音楽分野で、長く邦楽器による創作現場を注視してこられた三人の批評家に合議して選曲して頂いた。選曲の対象としては二つある。先ず、過去四年の「邦楽器の祭典」出品作から四作。これは奇しくも各年から一作ずつの結果になった。各氏が推された栗山和樹作品が、コンピューターを扱う作曲者本人がコンサート時に不在のため上演不可能になったのは残念である。

選曲対象の二番目は、現代邦楽の合奏分野で三氏の印象に残ったものを全て挙げて頂いて候補とした。但し今回の日本音楽集団の編成から著しくはみでる作品は外さざるを得なかった。また日本音楽集団と長年関わって、現在も集団のレパートリーとして上演チャンスの多い長沢、三木作品は遠慮させて頂いた。ともあれ三氏には、選曲の労を多としつつ、今後ともこの分野の隆盛のため健筆を振っていただきたいとお願い申し上げる。

日本音楽集団は1964年の創立以来三十年を経た。'60年代は、邦楽器のために、この編成のために作曲を、と知り合いの作曲家たちに頼み歩いても殆んど顧られることがなかった。今は、今回選ばれた譚盾のような外国人作曲家でも喜んで作曲してくれる。日本作曲家協議会所属の全作曲家が、邦楽器作品を持って当然、の雰囲気を持つようになってきた。この祭典の企画・構成を担当してこんなに嬉しいことはない。

(日本作曲家協議会副会長)

1月27日(木) 日本作曲家協議会会員による作品展

司会＝山本直純

<p>1.大田 桜子 時を彩る (初演)</p> <p>私は日本の旋律と西洋音楽とを渾然とできないだろうかと考えていました。箏三面・篠笛・ひちりきで五色の糸を染め、巡り行く時を表現してみました。</p> <p>[篠笛] 西原貴子 [ひちりき] 西原祐二 [二十絃箏Ⅰ] 熊沢栄利子 [二十絃箏Ⅱ] 久東寿子 [二十絃箏Ⅲ] 高橋はるな [指揮] 大田桜子</p>	<p>5.杉浦 正嘉 林間に遊ぶ二挺の糸 (初演)</p> <p>東洋・日本文化の原点である森(自然)。この自然の一員としての自然との共存、否、森・自然と一体となり自然そのものとして在るその歴史、それよりの文化とその学び。このイメージよりの発想を二挺の糸(三味線)にてまとめてみました。</p> <p>[三味線Ⅰ] 太田幸子 [三味線Ⅱ] 田中悠美子</p>
<p>2.熊田 洋 OCTAL</p> <p>初演時はばかばかしいほど短い曲だったが、今回「あまりにも短すぎる」とクレームがついたので少し書き足した。邦楽独特の狭い半音の逆をいって、四分の三音を多用した八音音階を採用した。</p> <p>[箏] 花房はるえ</p>	<p>6.見目順一朗 尺八と琵琶のための葛状合奏「空調口調」(初演)</p> <p>道元の『正法眼蔵』にみられる論理と詩性とを作曲において表現する道を、『空調X調』に見出した。これがその第一作で、空調と口調との相見の親密さが探求されている。</p> <p>[尺八Ⅰ] 竹井 誠 [尺八Ⅱ] 石田忠史 [尺八Ⅲ] 米澤 浩 [琵琶] 石田さえ</p>
<p>3.小山 和彦 風 林 (初演)</p> <p>林の中を逍遥するようなイメージをもって、この曲は一定のピッチや音型を徘徊するような楽想を主要な構成要素とした。私にとっては邦楽アンサンブルのための処女作。</p> <p>[尺八Ⅰ] 藤崎重康 [尺八Ⅱ] 石田忠史 [尺八Ⅲ] 米澤 浩 [三味線] 太田幸子 [箏Ⅰ] 宮越圭子 [箏Ⅱ] 大畠菜穂子 [箏Ⅲ] 高橋はるな [打楽器] 立枝恵子 [指揮] 小山和彦</p>	<p>7.宗像 和 「水」第六 (初演)</p> <p>1945年8月の広島、長崎で「水……」と訴えつつ息絶えたあの人達に飲まれた水、飲まれなかった水。今日なお地球上に漂うあの水たちの気持を民族楽器で美しくうたうシリーズの第六作目。</p> <p>[笙] 西原貴子 [ひちりき] 西原祐二 [二十絃箏] 木村玲子</p>
<p>4.石井由希子 夕 風 (初演)</p> <p>このところ邦楽器を使っの作品を多く手掛けており、とりわけその中でも二十絃箏の魅力に惹かれております。こんな思いから今回二十絃箏の独奏曲を出品させて頂きました。</p> <p>[二十絃箏] 木村玲子</p>	<p>8.村尾 幸映 七零九参—古都奈良の四季…(秋) (初演)</p> <p>春日山を含む奈良公園に天平文化の歴史を語る寺院が数多く点在し自然と融合し古都の四季を一層優雅に織り上げている。紅葉の中を散策する人と五穀豊じょうに感謝する秋祭を描いてみました。</p> <p>[尺八Ⅰ] 藤崎重康 [尺八Ⅱ] 石田忠史 [箏] 城ヶ崎美保 [二十絃箏] 熊沢栄利子 [十七絃] 大泉一美 [打楽器] 望月太喜之丞</p>

9. 眼龍 義治

立山の賦—大伴家持に寄す— (初演)

万葉集4000番、大伴家持の同名の長歌を以前合唱曲とした。今回合奏曲に改作しました。前半は万葉時代の音を想像して作り、後半は八橋検校以降の音を用いてまとめました。

[笙] 西原祐二 [龍笛] 西原貴子

[尺八] 坂田誠山

[箏I] 花房はるえ・佐藤里美

[箏II] 大島菜穂子・大泉一美

[十七絃] 久東寿子 [指揮] 眼龍義治

10. 佐野 芳光

Passionate Blue (初演)

私のこのシリーズの一貫したテーマは、ブルースと邦楽の融合にあります。私の音楽の出発点は、ブルースギターですが、その根底は、邦楽ととても共通性を持っています。

[篠笛] 竹井 誠 [尺八] 米澤 浩

[三味線I] 工藤哲子 [三味線II] 田中悠美子

[琵琶] 石田さえ [二十絃箏] 熊沢栄利子

[十七絃I] 大島菜穂子 [十七絃II] 久東 寿子

[打楽器] 望月太喜之丞・杉浦邦雄

11. 松永 通温

吉井の六段

以前勤めていた群馬県の短大で、高校の先生方を対象とする邦楽講習会のために、初心者でも合奏が楽しめるようにと作曲しました。八橋検校の「六段の調」の構造を参考にしました。「吉井」というのは短大の所在地です。

[篠笛] 竹井 誠 [尺八] 坂田誠山

[地唄三味線I] 工藤哲子 [地唄三味線II] 原田富士江

[箏] 木村玲子 [指揮] 松永通温

12. 小橋 稔

まつり (初演)

幕末に興った邦楽合奏の芽ばえが明治維新によって断絶させられてから約100年、平成になってそれを復興したこの会が五回を重ねたことを祝い、まつりを作曲した次第です。

[篠笛] 竹井 誠 [尺八I] 坂田誠山

[尺八II] 米澤 浩 [三味線] 太田幸子

[箏I] 花房はるえ [箏II] 佐藤里美

[箏III] 大泉一美 [十七絃] 宮越圭子

[打楽器] 前田文男・立枝恵子 [指揮] 田村拓男

「邦楽器の祭典」は共同の広場

田村 拓男

作曲家といえば洋楽を作曲する人というのが一般的通念ですが、その作曲家の中にも邦楽器のための作品を書いてみたいという人が着実に増えていることが過去4回の「邦楽器の祭典」の経緯を見てもはっきり分かります。

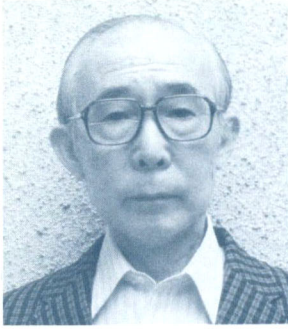
何をもって洋楽か邦楽かはまた別な問題ですが、いわゆる日本の伝統的な音楽といわれる邦楽の世界を築いた人々のもつ感性には洋楽のそれとはまた違った素晴らしいものを感じずにはいられません。いろいろな経緯やジャンルを超えて「現代の日本音楽の創造」を共通の目的にする人たちが、お互いに啓発し合い、協力し合うことによって一層進展するものと思われまます。「邦楽器の祭典」がその共同の広場になればこんな幸せ

なことはありません。

5回目という一つの区切りにおいて過去4回の「邦楽器の祭典」で生まれた作品の中から4作品と日本音楽集団30年の活動で生まれた数百曲の中から3曲を評論家の富樫康、上野晃、石田一志の三氏に選んで頂き一晩のプログラムと致しました。

尚、日本音楽集団30年の活動の中心的存在として作品を書き続けた長沢勝俊、三木稔両氏の作品及び多数の助演を要するものや特殊編成による作品、また最近上演した作品は今回は外して頂くなど困難な条件の中で選択して頂いた評論家三氏のご労苦に感謝し、みなさま方にもご了承賜りたいと存じます。

(日本音楽集団代表)



第五回邦楽器の祭典によせて

富 樫 康

今夕催される「現代邦楽秀作展」の前半は、過去四回の「邦楽器の祭典」に上演された57曲の中から四作品を選ぶ目的で、われわれ三人が改めて全曲をテープで聴き直して選んだものであるが、そこに選ばれた四曲が、期せずして三人ともピッタリ合一したことに驚きを禁じ得なかった。57曲の間から、その出来映えを決めるのに、いかに今の世でコンピュータが発達したとはいえ、科学的に選定する器械等はない。そこでは人間が保有する耳と頭脳による価値判断が左右するわけであるが、個々の価値観が異なる筈の三人が、一つの差異もなく合致するというのも珍しいハプニングであった。そこでここでは選ばれた四曲について、私なりの所感を申しあげる。

下山一二三の邦楽器のための「カタリシス第3番」は、鼓と横笛、それにかげ声も加わっての緊張感のある肅然とした日本的空間構成の点で秀作と思った。

柳田孝義の三本の尺八と十七絃のための「綵」は、根本的には尺八本来の冥想的な禅の哲学が底流しており、そこに現代の作曲技法が投入されて、尺八の三奏者（三楽器）が対位法的に入り組んだり、尺八吹奏の強弱、半音階的流れや揺れ等の微細な音運動で、心理的にも細やかな表現がなされている点で高く評価する。

松永通温の三絃と二面の箏のための「虹の糸」は三楽器の対位法や、音程の捻り等が、とても新しい魅力となっている。邦楽の渋味と洋楽のコントラクションの妙味が、巧に合流した、いわば大人の芸術である。

鈴木英明の二本の尺八と箏、打楽器のための「舞」は、多角的な視点から音の突込みを行っているので、一寸難解な所もあるが、尖鋭で現代的感覚な所がいい。

第二部の「集団30年の活動から」は、座付作曲家として長期間活躍した三木稔と長沢勝俊の作品には、その代表的作品の数々が存在するわけだが、それらは頻繁に上演されているので、今回は外して頂いた。若し時間が許せば、私は「ニューかがらパフォーマンス」という三木、長沢その他の代表作をメドレー風に繋いだ約1時間の作品を入れてはどうかと提案したが、こ

れは時間的に許せなかった。

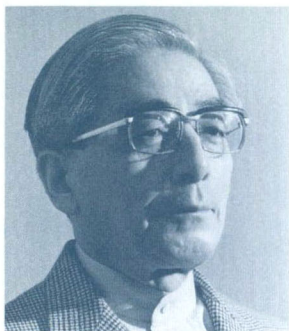
伊福部昭の郢曲「鬢多々良」、広瀬量平の「夢十夜」それに西村朗の「巫幻楽」の三曲がやはり三人の合議で決められたのだが、「巫幻楽」は特殊楽器が多すぎるので除外された。それに代って中国の作曲家譚盾の「金雀」が選ばれたわけである。

邦楽器は日本の伝統楽器とはいうものの、その源流を遡れば、何れも中国から渡来したもの。従って同じアジア系の中国人が日本の楽器（今の中国では昔と同じ原形の楽器は使っておらず、日本楽器は唐の時代のものだそうである）を用いた場合の一例として注目し値する。譚盾は昨年サントリー音楽財団が催した作曲家の個展'73で、彼のオーケストラ作品による演奏会を催したほど人気が高い。

伊福部昭は映画「ゴジラ」の音楽で有名だが、約20年ほど前に、氏の管弦楽特集を東京文化会館大ホールで催したときは、同ホールが、日本の作曲家では珍しく満員になったほど人気のある作曲家である。「鬢多々良」は氏の民族主義的作風が、雅楽の雅かさと合流して盛大にもり上る楽曲である。「夢十夜」は同じ1973年に荒谷俊治の指揮により初演された曲で、演奏が終わったときは興奮して、はね返るような喚声と拍手が湧きあがった曲である。今回除外された「巫幻楽」は編成も大きく、観客の興奮の度も激しくなるような曲であるが、一方、それに抵抗する聴衆もあり、賛否が二分する経緯のある曲。筆者はいつか再演されるのを期待する一人である。

現代邦楽秀作展

上野 晃



和洋両音楽が天秤に懸けられ、両立や折衷が計られて、邦楽という言葉を使わざるを得なくなった明治期、在来の日本伝統音楽のあらたな出発点が、〈現代邦楽〉の発祥であった。積極的に洋楽の形式と手法を邦楽に取り込み、古来の伝統音楽の老化を防ごうとした〈新日本音楽〉、この大正時代より昭和初期に掛けてのきわめて自由で個性的な新作活動は、〈現代邦楽〉の輝かしい第一期と見ることができる。第二次世界大戦後、先進的な邦楽家たちは、西欧音楽の近代・現代のスタイルや手法を採り入れ、最先端の技法にまで手を染める。が、洋楽畑の作曲家が邦楽器のための作品を書き始めたのも、ほぼ太平洋戦争後、ごく一部が戦中からであった。邦楽家から洋楽系作曲家への熱いまなざしが集中していく。いよいよ〈現代邦楽〉第二期の到来。ここからしかし今日まで、すでに四半世紀が過ぎてしまった。

いまでは、邦楽畑の作曲家の洋楽の手法を用いた作品も含まれるけれども、初めは洋楽系作曲家の手になる新邦楽作品を指して〈現代邦楽〉と呼んでいた。邦楽器を道具のようなマテリアルとして使い、新領域のメディアにしようとするもの。洋楽的作曲法によりながらも、邦楽器のイデオロムを尊重し、それとのかかわりあい確かめていこうとする作曲。この二つに大別されるが、前者と後者とが、一人の作曲家のうちに両存する場合もある。近世邦楽のそもそも声楽的優先から現代の器楽優位へ、そしていままた声楽の後手が心配されている。現代の言葉と邦楽器の課題は、やはり最難関だが、漸次成果をもたらせる領域も見えてきた。長いあいだ祭祀の雅楽というパラダイムのなかでしか存在できなかった楽舞が、今日の現代音楽社会のなかにいろいろ形や姿を変えてあらわれるようになり、新作雅楽が書かれ、また雅楽の楽器が独立して、それぞれ別個の器楽的活動も営む。

かつて〈現代邦楽〉初演作品が百曲を越えた年があった。七十曲前後というのが平年作だが、少し以前まで邦楽器のための作品を書く作曲家は、限られていた。いまでは誰もがといえるほど多くの作曲家が、このジ

ャンルの作品を手がけている。こういった活発な現代化の動きに連れて、古典邦楽の世界を守り見直す傾向もますます強められ、現代邦楽の隆盛が、古典邦楽の復興にも刺激を与えたと思われる。伝統音楽墨守の古典主義といえども、他からのさまざまな影響を免れ得まい。洋楽 vs 邦楽は、もう限りない干渉現象を見せつつも、相変わらず揺るぎない邦楽社会と洋楽社会が厳として存在し、この二つが一つになることはない。こうした日本の音楽社会の二元的並立、私たちはいつも洋楽と邦楽を両岸に見て、音楽の河を航行しなければならない、と思う。

日本音楽集団は、〈現代邦楽〉の地図からいえば、中心広場の観がある。ここから羽搏いたり、このロータリを通過していった演奏家、作曲家もかなりの数になる。当集団が三十年間に初演した新作とその再演は、多大な量にのぼり、それを棚卸して十指に充たない作品を選出するのは至難に思われた。

尺八二本の二声旋律を軸に箏と洋風打楽器で器楽的密度と固有のテクスチュアを生む鈴木英明《舞》。三絃と二面の箏にそれぞれ伝統的な美意識を浸透させつつポリフォニックな空間を創る松永通温《虹の糸》。二本の尺八と十七絃によって濃淡と内面の吐露を迫る柳田孝義《綵》。尺八と能管と三絃と小鼓などの打楽器に声も加わってかなり能的シチュエーションに誘う下山一二三《カタリシスⅢ》。以上をいわばアンデパンダンの〈邦楽器の祭典〉過去四回の五十七作品より選ばせてもらった。また、集団成長期の委嘱作から忘れ得ぬスケールの大きい二作品、しかし色彩的には対照的でもある伊福部昭《鬢多々良》と広瀬量平《夢十夜》を、外国からの比較的新しい委嘱作の譚盾《金雀》、尺八が主導権を握るが、指揮者も一つのパートを努め、休符の沈黙がきわめて重い意味を持つ、このユニークな作品を加えた。

これら秀作展の曲目すべてを、選者三人の一致した評価で推薦できるとは思っていなかった。意外だが、清々しい気がする。



「邦楽器の祭典」

石田 一志

日本音楽集団と日本作曲家協議会の主催による「邦楽器の祭典」は、1989年に16人の作曲家の新作を集めてその第1回が開かれました。日本音楽集団は毎年いくつかの委嘱作品を定期演奏会で初演しておられますが、毎回、比較的短い作品とはいえ、一挙にこのように多数の新作を初演するこの「祭典」は、多彩な内容が組まれる同団の定期演奏会のなかでも、とりわけ変化と活気に富んだシリーズとなりました。また、この「祭典」は作曲家協議会の各種の事業のなかでも、会員作曲家たちの関心や意欲をかきたてた企画であったと思われる。今回、シリーズ5回目を記念して、2日間の演奏会とレクチャーが計画されたわけですが、その第2夜の演奏会の選曲を富樫康先生、上野晃先生と一緒に担当させていただきました。

過去の4回の「邦楽器の祭典」からの秀作選と、過去30年の日本音楽集団の活動のなかからの秀作選を行なうということで、「祭典」それ自体の歩みと、「集団」の歴史という二つの面から過去をふりかえり、その歴史の厚みのようなものを伝えることが要求されたわけです。前者に関しては、改めてこれまでに初演された57作品を録音で聴き、各人それぞれに推薦作を用意して討議をし、作品を絞り込んでいきました。幸い、意見の一致をみるところが多く、最終的には作風、編成などに変化のある作品を各回毎に1作ずつ選ぶことができました。

つまり、第4回から、2本の尺八の対峙や融合とそこに色彩的リズム的变化を加える箏と打楽器の組合せの音楽的な密度の高い鈴木英明氏の「舞」。第3回から、地歌三味線と2面の箏を用いて、自由な音の使い方での日本の叙情を描いた松永通温氏の「虹の糸」。第3回から、一尺八寸管と二尺四寸管の2本の尺八と十七絃で詩情に富んだ音の綾を織った柳田孝義氏の「綵」。第1回から、楽器の特性を追求した技巧性とシャーマニズム風のエモーショナルな世界を展開した下山一二三氏の笛、三味線、箏、打楽器のための「カタリシス」第3番、ということになったわけです。もちろん、各自、

他にも再演の機会が欲しいという作品はありました。私の場合では、たとえば、小橋稔氏のユーモラスな「火男」、尺八とコンピュータによる栗山和樹氏の「破竹」、3本の尺八による見目順一朗氏の「葫蘆藤」、金田潮児氏の3面の二十絃箏のための「花片舞への前奏曲」などです。これらは、次の機会を期待したいと思います。

後半のプログラムの選曲は、30年の集団の歴史からですから、200曲ほどもある楽団のレパートリーから選ぶことになりましたが、まず、演奏機会の多い三木稔氏と長沢勝俊氏の作品と、最近の定期演奏会で取り上げられているものは、この際、選曲対象から外すことにしました。そこで選ばれたのが、この譚盾氏の「金雀」、伊福部昭氏の「鬢多々良」、広瀬量平氏の「夢十夜」の3作です。いずれも聴き応え十分な名作と思います。この内、譚盾氏は、日本作曲家協議会が90年に主催した「アジア音楽祭」で日本デビューをかざり、その後、国際的に活躍しているアメリカ在住の中国の若手作曲家です。昨年は、サントリーホール主催の国際作曲委嘱シリーズで新作オーケストラが2作日本で初演されて話題になりました。この「金雀」は、たまたま私が司会を担当した第119回の定期「海外からの作品特集」で初演されたもので、大変印象に深く刻まれている作品です。こうした邦楽器作品の特集にすぐれたアジアの前衛的作曲家の作品が含まれるということは、また大いに意味があることだと思います。

(社)日本作曲家協議会

〒160 東京都新宿区信濃町33 信濃町ビル602
電話 03-3359-3916 Fax. 03-3359-2927

日本音楽集団

〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302
電話 03-3378-4741 Fax. 03-3376-2033